

中 勘助
随筆作家

一六 鳩のねぐら

中 勘助

あるとき、ことのほか静かにしんとふけた晩があつた。
あくる朝目をさましたら、いつもと調子のちがふ不透明な
雨だれの音がしてゐた。風もそよかす、往來の音も聞えず、
戸の節穴からさしこむ光がいつまでたつても黄色みを帯
びてこない。私はまた霜がおりたのかしらと思つた。そ

の時どこかで物の落ちる音がして枕にひびいた。私は、「雪だな。」

と気がついた。それと同時に

「鳩はどうしたかしら。」

と思つた。目がみえなくなつてから降りだしたこの雪に、ねぐらとたのむ孟宗の枝を幹ぐるみ押し倒され埋められて、昨夜どこにどうして夜をあかしたであらう。

雪は思ひの外にもつた。粉雪がまた小やみもなく降りしきつてゐる。灰色の空から寂しく、いたましく、すさまじく、音もなく。

その日私はたび／＼鳩のことを氣づかつた。彼女は一

日影も見せなかつた。さうして雪折の音ばかりして日が暮れた。

翌日空は底の底まで澄みわたつて、ほこ／＼した日和になつた。雪がとけるにつれて萌えだすやうに木の葉があらはれてくる。眞紅の南

天の實、暗緑のもちの葉、春を待つどうだんの芽など。鳥はおの／＼わが身にふさはしい高い低い聲をあげて、とりか

エルサレム
パレスチナの首
府キリスト教の聖
地

へされたエルサレムをことほいでゐる。私の部屋の前の竹は、頭の方をかたく地におしつけられて、屈強な幹を石弓のやうに撓めてゐたが、時を置いては一つ一つひどい勢ではね起きて、眠からさめた獣のやうに身をふるふ。

私が書物を読んでゐたときには、はたくと翼をうちあふ音、ひゆうひゆうと風をきる音がした。鳩がねぐらを見に来たのであらう。しかしその竹は細くて力が弱いので、まだ起き上がることができず、いつもその膨らんだ胸をのせる二股の枝は覆されたやうに立つてゐる。それを見て鳩はすぐに行つてしまつた。

竹がねたためにいつばい日があたるやうになつた私の

部屋は、竹が起きあがるとともに再びもとの日蔭になつた。またもや竹の葉が障子に更紗模様をおく。鳩は折々見にくる様子であつたが、その竹と春日燈籠だけはどうしてもし起さない。それが今日になつてやつとおくればせに立ちあがつた。私は鳩がまた寝にくるのが嬉しいと思つてそのねぐらを見たら、幹に癖がついたので、肝腎の枝のところか傾いて、寝心地がよささうにもない。どうかしらと危んでゐたら鳩はとうとう來なかつた。

—沼のほとり—